

米中合作映画『グレート・ウォール』再考

— アメリカ・インディーズの中国人監督 ピーター・ワン 王正方の軌跡

門 間 貴 志

アメリカでは、インディペンデント映画とは、ハリウッドのメジャースタジオ六社の傘下に属さない独立資本やアートハウス系のスタジオなどの作品を指す。それらの多くがローバジェット（小規模予算）で、上映館も限定されている。とは言ってもそれはメジャーと比較しての小規模ということであり、その製作費は日本の商業映画と同程度の規模である。一九八〇年代、アメリカではインディーズの一つの黄金時代を迎えた。一九六〇年代のジョン・カサベテス、マーティン・スコセッシ、一九七〇年代のウディ・アレンらを先駆とし、一九八〇年代にニューヨークではジム・ジャームッシュやスパイク・リーらを輩出し、脚光を浴びるようになった。ジャームッシュとリーの作風は違っていたが、同時期にニューヨーク大学映画学科で学んでいたこともあり、ニューヨークから登場したこの新しい動向は世界から注目された。アメリカにとって大きなターニングポイントであったベトナム戦争は、アメリカの若い世代に内省のプロセスをもたらし、外の世界への関心と理解を促進した。スパイク・リーらマイノリティを扱う映画の台頭は、ベトナム戦争の終結から七、八年後のことだった。

こうした動向の中、さらに風変わりな映画が登場した。中国系の王正方^{ピーター・ワン}が監督した『グレート・ウォール』である。この映画は非常に特別な意味を持っている。改革開放後の中国本土で撮影された最初

のアメリカ映画であり、一九八六年には、アメリカでその年に（ハリウッドメジャー以外の作品で）もっともヒットした上位五作に入っている。今日のいわゆるインディペンデント映画の製作はもはやそれほど「独立」してはいないが、王正方^{ピーター・ワン}はその黄金時代を経験した一人である。今日、言及される機会は少なくなったが、本稿ではレーザー開発にたずさわる科学者だった王正方^{ピーター・ワン}がそのキャリアを中断し、映画製作に到った過程を追い、このデビュー作について検討を試みるものである。

一 華僑の左翼知識人として、電子工学者として

映画監督の王正方^{ピーター・ワン} (Peter Wang/Wang Zhengfang) は、一九三八年に中国・北京で出生したと多くの資料で紹介されているが、正確には日中戦争時に一家が暮らしていた湖南省長沙で生まれ、日本の敗戦後に北平（北京）に戻ったのであった。姉が五人、兄が一人の末っ子であった。

王正方^{ピーター・ワン}の父、王壽康^{おうじゅうこう}（一八九九～一九七五）は、祖籍を河北省武邑とする。北京師範大学付属中学から北京師範大学国文科へ進み、黎錦熙^{きんき}（一八九〇～一九七八）教授^①に師事し、卒業後も研究科に進んだ。

北伐軍が組織されると、王壽康は国民革命軍の陸軍中佐となり、その後、北平女子師範大学、北平大学で教職に就き、中国大辞典編纂所の編纂員、山東済南民衆教育館電影院の主任などをつとめた。国民政府鉄道部津浦鉄路局の教育主任時代、妻の曹端群、長男の王正中（一九三六〜二〇一七）とともに南京に移った。一九三七年に日中戦争が始まると、職場は武漢、そして長沙へと移り、そこで王正方が生まれた。その後陸軍の第三戦区政治部戦地工作団団長として、兵士の識字教育、抗日宣伝、劇団の巡回公演にたずさわり、一九四五年に戦争が終わると、一家は北京に戻った。

北京師範大学の黎錦熙教授が国語専修科を設立し、弟子であった王壽康を副教授に任命した。中華民国教育部（文部省）は国語の統一を促進するため、一九四七年に〈国語小報〉を北京で創刊した。翌年一月、教育部長の朱家驊が国語小報の台湾移転を決め、〈国語日報〉と改名した。一九四八年、王壽康は国語日報の副社長として台湾への赴任を命じられたため、一家は台湾に移った。国語日報の社屋は台北の植物園の敷地にあったが、もとは建功神社で、美しい日本式庭園が残っていた。子供時代の王正方は植物園内にある清朝時代から残された古い衙門の前で映画撮影の現場に遭遇したことがあったと後述している。台湾で制作された最初に清王朝時代を描いた時代劇映画で、王正方はその撮影を興味深く観たという。

王正方は、台北市立国語実験国民小学（旧・台北師範学校第三附属小学校）に学んだ。書家であった母の曹端群は、この学校で図画を教えた。母方の叔父である曹紀陶は、京都帝国大学を卒業後、青島の税関に勤めていた。日本料理や日本酒を好むこの叔父から、王正方は日本留学時代の思い出をしばしば聞かされた。いわく、京都人は素養が高く伝統文化を尊重し、漢籍にも通じていると。両親や親族の影響を受け、中国の伝統文化に育まれた王正方は、台北市立建国高級中学に進んだ。言うなれば、文士的な知的環境で育ったのである。

王正方は、国立台湾大学（旧・台北帝国大学）の電機工学系に

入学した。演劇に関心を持っていた王は劇団に入ろうとしていたが、父の反対にあい、理系へ進んだという経緯がある。「好男兒不要念文科（男兒たるものは、文系科目は学ぶべからず）」という当時の台湾社会の風潮もあった。彼が大学生だった一九五九年、父が脳卒中で倒れた。当時の台湾は保険制度などが未整備だったこともあり、一家は経済的に困窮した。それでも国語日報の同僚や父の教え子らの支えで苦境を乗り越え、一九六二年には、兄の正中に続いてアメリカに留学することができた。ペンシルバニア大学のムーア電気工学校の研究奨学生となった王正方は、レストランの皿洗いやウェイター、工場の整備士などのアルバイトで生活費を稼ぎながら、マイクロ波検出システムの研究に没頭した。台湾大学で有機化学を専攻していた兄の正中は、カリフォルニア大学バークレー校で生物化学の道に進んだ。

一九六八年、王正方は台湾では読むことができなかったであろう、エドガー・スノーが抗日戦争期の毛沢東らを取材した著書『中国の赤い星（Red Star over China）』に感銘を受ける。そしてより公正な社会システムを追求しようとした華僑の左翼知識人に連なることになる。アメリカのベトナム派兵に抗議する反戦運動にも積極的に参加する。一九七一年に「保釣運動」（日本が実効支配する尖閣諸島を中国固有の領土とし、その返還を求める運動）が起こると、アメリカでの運動に参加していた台湾人のグループに加わった。同年二月、ニクソン大統領の電撃的訪中があり、十月には中華人民共和国が国連に加盟を認められ、中華民国は脱退した。その翌月の十一月、王正方と李我焱、陳智利、陳恆次、王春生ら五人の台湾人留學生の保釣運動家グループ〈保釣0団〉は、香港経由で秘密裏に北京を訪れた。〈保釣0団〉のリーダーの李我焱は、コロンビア大学で博士号を取得し、同校の物理研究所で中国のマリー・キュリーと呼ばれた物理学者、呉健雄（一九一二〜一九七）教授のもとで研究にたずさわっていた。

訪中七日目、十一月十八日の夜、突然赤い旗を立てた車が宿舎にやっ

て来て、彼らは中南海にある建物に連れて行かれ、そこで周恩来首相と会見した。予定されていた会見は、周首相が多忙のため延び延びになっており、この日の夜しか時間を割くことができなかった。まだ公にされていなかったが、九月十三日に、毛沢東暗殺によるクーデターに失敗した国防相の林彪が、ソ連へ逃亡途中、モンゴル領で墜落死するといういわゆる「林彪事件」が起こっており、周首相はその事後処理にあたっていたのであろう。王正方らは、台湾情勢や留学生の祖国への奉仕の気持ち話を話すつもりだったが、周首相が一気に四時間話をした。そして料理人に夜食の雲吞を作らせて彼らにふるまった。会見は夜の十時から朝の四時まで続いた。中国の当局者は、この会見は非公式なものであり、写真を撮ったりメモをとったり、会話の内容をもとに記事やレポートを書いてはならないと警告した。また新華社通信は彼らの安全のため、滞在中の写真を撮らず、この会見も報道しなかった。彼らの帰国は香港を経由しないルートだった。北京からパキスタンのカラチ、パリ、カナダのトロントを経由し、帰国までに十日を要した。しかし、五人の入国は香港の港湾当局からの連絡で、ただちに中華民国政府の知るところとなり、彼らの台湾パスポートは取り消された。ブラックリストに載った王正方は、一九七五年に父が亡くなった時も、台湾にもどれなかった。李我焱は呉健雄の研究所を去り、国連の職員となった。

王正方は文化大革命に関する凄惨なニュースを国民党側から発せられたプロパガンダだと思っていたが、アメリカに戻った後、それが事実であることを知るようになる。中国共産党に幻滅した彼は、一九七三年には中国共産党を批判する文章を香港で発表し、中国のブラックリストにも載ることになった（後に解除された）。

一九七二年に電子工学の博士号を取得した王正方は、IBMでエンジニアの職に就いた。ほどなく、昼間は国防省のためにレーザーの研究を行ない、夜はベトナム反戦運動に参加している自己の矛盾に悩む。そして同社を去り、大学の教員となった。

その一方で一九七二年、王正方はサンフランシスコで、劇団〈日出劇団 (Asian Living Theater)〉に参加、教職のかたわら、一九七八年に解散するまでの間に十六編の脚本を書き、演出も担当した。演劇に対する関心は消えてはいなかった。

二 ニューヨーク・インディーズから 香港・ニューシネマへ

一九七七年、王正方は、映像プロデューサーの孫小鈴とともにドキュメンタリー映画『新中国の古い宝物 (Old Treasures From New China)』を撮った。さらに一九八〇年には、テレビドキュメンタリーシリーズ『中国の都市 (Cities of China)』の「北京篇 (Episode of Beijing)」を撮った。上海出身の孫小鈴は、台湾を経てアメリカに渡り、一時日本女子大に留学したこともあるが、スタンフォード大学で美術史の博士号を取得し、サンフランシスコの中国文化協会のエグゼクティブ・ディレクターとして、中国文化を紹介する映画の制作にたずさわっていた。米中国交正常化の後に初めて中国の映画界に招かれたアメリカ人でもあった。

ジョージ・メイソン大学工学部の副教授時代、王正方は、王穎（一九四九）監督の映画『チャンは行方不明 (Chan is Missing / 尋人)』（一九八二）に出演した。

王穎は、アメリカのインディーズ映画における中国系のパイオニアである。一九六七年、十八歳の時にカリフォルニアに移り、カリフォルニア芸術工芸大学で映画制作を学んだ。卒業後、香港で助監督やテレビシリーズの演出を手がけたが、香港映画界の現状に飽きたらずアメリカに戻り、『チャンは行方不明』で脚光を浴び、続く『点心 (Dim Sum: A Little Bit of Heart)』（一九八四）でインディペンデント作家を代表する一人となった。他の作品に『スラムダンス (Slam Dance)』（一九八七）、『命は安く、トイレットペーパーは高

『Life is Cheap... But Toilet Paper is Expensive』(一九八九)、
『夜明けのスローボート (Eat a Bowl of Tea)』(一九八九)、『ジョ
イ・ラック・クラブ (The Joy Luck Club)』(一九九三) などがあ
る。

『チャンは行方不明』は二万ドルの低予算で撮られた十六ミリ映画
ではあったが、メインストリームに乗ったアジア系インディーズの最
初の映画となり、中国系の狭い映画サークルのみならず、アメリカの
マイノリティ出身の映画作家たちにも大きな刺激を与えた。王、穎ら
をはじめとするこの時期のアジア系の若手が映画の素材としたのは、
自らの文化的ルーツであり、文化的アイデンティティの問題であり、
インディーズの動向と重なる点が多かった。チャイナタウンの街角を
舞台とした『チャンは行方不明』は、中国系に対する異国情緒的なス
テレオタイプを排していた。インディーズには、日系のアート・ノム
ラ(一九四五)、ステイブン・オカザキ(一九五二)、グレッグ・
アラキ(一九五九)らがいたが、彼らもやはり日系に対するステロ
タイプに抗うような作品を撮っていた。

『チャンは行方不明』での演技体験をきっかけに、アジア系による
映画製作の可能性について確信を得た王正方は、本格的に映画の道
に進む決意をした。勤務校の学部長は、王の演劇・映画活動のことは
知っていたものの、突然の辞職の申し出に驚愕した。州政府から研究
費を獲得したばかりで、また王の教授昇進もまぢかに迫り、いずれは
学部長にと考えていたのである。映画の撮影は夏と冬の休暇にできな
いかとも提案したが、王正方はきっぱり固辞した。

一九八三年、大学を辞した王正方は、俳優、脚本家、監督として
活動すべくニューヨークへ移った。当時のマンハッタン八番街には、
若い台湾人作家の舒國治(一九五二)、作家で映画監督の馮光遠
(一九五三)らがおり、デビュー前の李安監督(一九五四)が脚
本の構想を練っていた。

王正方は、劇団時代の旧友の台湾人戈武とともに香港で映画を撮
る夢を持っていた。戈武は一九七〇年代にカリフォルニア大学バ
レー校で映画と演劇を学び、王正方同様、保釣運動にも積極的
に参加していた。香港中文大学の卒業生によって創設された劇団
〈致群劇社〉は、戈武を舞台劇『將軍族』の演出顧問として招い
た。陳映眞(一九三七)の小説『將軍族』は、一九六四年に発
表された作品で、本土から来た楽団員と台湾人少女の愛憎を描き、台
湾で非常に広範な反響を起した。次に戈武は傅運籌、李渝ら
と『日出』を演出した。『日出』の原作は民国初期の天津を舞台と
し、当時の半植民地・半封建社会における弱者の悲劇を描いたものだ
が、戈武らはこの物語を一九七〇年代の台北に置き換えた。五四運
動を記念し、一九七一年五月八日、バークレー高校の小さな劇場で上
演されると、予想外の賞賛を受けた。日出劇団はこの時結成された。
長城会社の招きで香港の映画界に加わった戈武は、俳優養成クラ
スの講師をしながら、『最後一班灰狗巴士』という題名の脚本を書い
た。しかし商業性に乏しいという理由で陽の目を見ることはなかった。
一九八一年、戈武が外科手術中の医療事故で亡くなると、友人の
方育平(一九四七)監督は彼を記念する映画『半邊人』を作ろう
とした。戈武が彼に託した脚本を仕上げたのは、王正方と施揚平
だった。

『半邊人』(一九八三)は、両親が市場で営む魚屋を手伝う少女阿瑩
(許素瑩)の物語である。彼女は兄弟姉妹たちと狭いアパートで暮ら
す。日々の生活は単調で忙しく、ボーイフレンドとの別れで傷つく。
ある日、香港電影文化中心(香港映画文化センター)の学生募集の広
告を見た彼女は、舞台芸術を学ぶ新しい生活を始める。クラスではア
メリカ帰りの講師の張松柏(王正方)と出会う。脚本を映画会社から
却下され続けた張は、脚の治療のためにアメリカに行くことにした。
彼は去る前に、学生たちが出演する演劇『將軍族』を演出する。張松
柏の指導で阿瑩は自身の経歴と教育についての劣等感を克服する。

俳優を探す過程で、実際に戈武の授業を受けた魚売りの少女、許素瑩を見つけ、彼女の両親、兄弟、姉妹を説得し、映画に出演させた。『半邊人』の王正方は戈武をモデルとした演技クラスの講師を演じた。劇中での教え方やワークシヨップ、また舞台『將軍族』での演技指導など、劇団での体験を反映したものであろう。

映画は、現代の香港人たちが理想半分と現実半分の状態におかれていることを示している。出演者のほとんどがプロの俳優ではないにもかかわらず、セミドキュメンタリーのスタイルの下、自然にそして鮮やかに役割を演じている。同時に、当時の香港のリアルな底層生活も見ることもできる。市場や住宅団地での生活など、一九八〇年代の記録映像としても興味深い。映画はまた、陳果（一九五九）などの映画製作者の伝説的な組織を育てることもあった。まだ無名だったバンド、Beyondの黄家駒（一九六二〜一九九三）と葉世榮（一九六三）も一瞬だけ映る。この映画はその時代の文学と芸術を愛する若者たちの生活のスケッチであると言える。

『半邊人』は伝説的な作品となった。第三回香港電影金像賞で最優秀作品賞を受賞し、最優秀主演男優賞と最優秀脚本賞にノミネートされた。演技のみならず、脚本を仕上げた経験は、王正方を大いに刺激し、自身の映画作りへの助走となった。

三 米中文化の衝突——長城は偉大な壁である

王正方の最初の監督作品は、主人公に自身の半生を色濃く投影させた『グレート・ウォール』（北京故事／A Great Wall）（一九八六）である。この映画は、改革開放政策が始まって間もない中国で撮影された。初の米中合作映画である。

一九八三年、孫小鈴は北京の中国新聞社傘下の南海影業公司与契約を結び、米中合作映画の制作プロジェクトを立ち上げた。これが『グレート・ウォール』の始まりである。カリフォルニアに戻った彼

女は、王正方と W & S Productions を設立して資金集めを始め、映画のアイデアを練り、脚本を共同執筆した。一九八四年の夏到北京でロケハンと撮影が行なわれ、秋にサンフランシスコの場面が撮られた。ニューヨークで編集などのポストプロ作業が行なわれ、一九八五年のテルライド映画祭でプレミア上映がなされた。映画祭での好評を受け、オライオン・クラシックスの配給で、全米二〇〇都市で公開、その後カナダ、香港、ロンドン、そして日本で公開された。中国では、一九八七年到北京と上海の劇場でごく小規模に公開された。

【物語】

サンフランシスコ在住のコンピュータ技師、方立群（王正方）は、中国人を差別した上司に憤慨して会社を辞め、妻のグレース（シャロン・イワイ）と息子のポール（余朝漢）と一緒に姉の一家を訪ねるため三〇年ぶりに北京行きを計画する。

姉の立敏（慎広蘭）は政府の役人だった夫の趙氏（胡曙光）、娘の莉莉（李勤勤）と暮らしている。莉莉は大学受験に備えて通っている英語の夜間クラスで、劉一達（王霄）と小于（修健）と知り合う。一達の父、劉（韓焱）は引退した英語教師で趙の旧友であった。趙が莉莉の英語レッスンを頼んだこともあって、莉莉と一達は親密になる。北京に着いた方立群一家は、姉の家に迎えられる。両家は、郊外にある亡父の墓を詣で、万里の長城を訪れ、ダンスホールで踊る。立群は中国コンピュータ協会を訪問し、グレースは義姉の立敏と親密になる。莉莉が卓球をしていることを知ったポールは、彼女の通っている卓球チームの練習場に入り浸る。ポールを通じてアメリカ文化に傾倒していく莉莉は、一達と少し陰悪になる。

北京大学の入学試験に臨んだ一達を、父の劉はねぎらう。一方受験勉強に遅れの出ていた莉莉は、試験前夜まで追い込みをかけたが体調を崩し、受験に失敗する。卓球の国際トーナメントで、ポールと一達は決勝戦で対戦する。試合は伯仲し、一達は勝利する。さらに一達は

北京大学への入学を果たし、小千たちから祝福を受けた。
アメリカに戻った方一家。ポールは中国での体験を興奮気味にガールフレンドに話す。立群の上司が会社に戻るよう説得に訪れる。そこには太極拳に似しむ立群の姿があった。

欧米の観客にとっては、「East Meets West」の妙味を感じさせるコメディである。アメリカ公開版では「The Great Wall is a great wall 北京故事」とタイトルにある。「万里の長城は偉大な壁である」とは米中間に横たわるギャップを示す言葉でもある。映画は、最初は当たり障りのない、平板な物語のように見える。ドラマチックな対立が集中しているわけではない。裕福でアメリカ化された立群は、言語と幼少時の記憶以外に中国の遺産を持ち合わせていない。言語のみならず、ライフスタイルや文化の違いにより、コミュニケーションには一定の障害がある。そのため、二つの家族は出会った日から多くの面白い体験をする。文字通り、東は西と出会い、両者はお互いから学ぶことになる。二つの家族は夕食とともにし、先祖代々の墓に敬意を表し、ひと夏の北京滞在は始まる。

王正方が一九七一年に北京を訪れた時、生き別れとなっていた五人の姉妹や叔父叔母たちを探したが、見つけれなかった。後に、四人の姉は亡くなっており、末の姉が太原にすることがわかった。主人公が三〇年ぶりに北京で姉に再会するという設定は、こうした体験を反映している。

文化の衝突 困難なコミュニケーション

米中の文化の衝突は、中国人の身体にアメリカを宿した方一家と、老北京の趙一家の間で起こる。北京生まれだが、十歳の頃（共産党政権樹立の少し前）に出国し、以来アメリカで暮らしている方立群は、英語と中国語の二重言語話者である。米中双方の文化を持っているが、実生活ではほぼアメリカ人である。勤めているコンピューター会社で

は英語で仕事をし、健康維持のため毎朝ジョギングを欠かさない。妻のグレースは典型的な中国系アメリカ人（三世と思われる）の生活を送り、フィットネスクラブでダイエットに励んでいる。中国文化をほとんど持っていないが、家では夫のために北京式の牛肉麵を作る。中国旅行に備えガイドブックを読みこむのに余念がない。旅行が決まっ

てから中国語のレッスンを始めるが、当然旅行には間に合わず、中国では一言も中国語を話さない。アメリカンフットボール好きで白人のガールフレンドがいる息子のポールも英語しか話せない。立群はポールに中国語を修得させたいが、ポールは全く関心がなく、親の勧める中国語のクラスも何年もさぼっている。父親から、自分の文化を否定すべきではないと諭されても聞く耳を持たない。北京では初対面の伯母である立敏にアメリカ式のハグをして戸惑わせ、趙家にシャワーがないことや、しゃがむトイレであることに軽い不満を持つ。

大学入試を控えた莉莉の苦手科目は英語であり、話す英語は片言である。立群が北京訪問を知らせてきた英文の手紙は辞書を引きながら読んでいた。ポールの話すネイティブの英語は聞き取れない。莉莉は父の古い友人である元英語教師の劉氏のもとで個人レッスンを受けることになるが、それは一達の父であり、それをきっかけに二人は親密になる。莉莉は習得した英語を駆使して世界を駆け巡る記者になりたいたと将来の夢を語る。英語の得意な一達はリンカーンの演説を莉莉の前で得意げに暗唱して見せる（これは王正方自身が高校二年の時に学校で暗唱した体験を反映している）。自分の英語はもう時代遅れだと謙遜する劉氏の英語の口癖は「If you want to study English well, You must study hard. That means to memorize a dictionary. (英語を修得したければ一生懸命勉強すること、それには辞書を暗記せよ)」である。政府高官であった趙氏は外国語とは無縁の部署にいたのであろうか、全く英語を解さない。立群に「長い間外国語を話していると口が疲れませんか？」とずれた質問をする。

グレースと立敏は、互いの言語を話せないが、親しくなろうと努め

る。立敏はグレースに中国風のドレスを縫い、グレースは立敏の顔に化粧を施す。しかし立敏は化粧をした顔を恥ずかしがり、娘には見せない。このシーンは二人の女性と二つの文化を著しく近づける。莉莉はグレースのアメリカ土産の服を着て、化粧を施してもらう。若い莉莉にとって化粧は興味津々である。まだまだ中国では化粧は一般的ではなかった。

中国で西洋のエチケットが遭遇した気恥ずかしさなど、いくつか面白いエピソードも盛り込まれる。混雑した路線バスに莉莉が最初に乗る、続いて乗ろうとしたポールは丁寧な他の女性を先に乗せたが、取り残されてしまい、バスの後ろを走って追いかける羽目になる。また、莉莉の私信を当たり前のように開封する母にポールは仰天し、この国にはプライバシーという概念はないのだと悟る。ポールの影響で私信の開封を拒むようになった莉莉は「わけのわからない外国語で親をケムにまくなんて」と母から叱られる。趙氏もポールが父親の頭を小突くさまを見て呆れる。こうした文化的ギャップも興味深い。

方一家に出会う前の莉莉は、英語の勉強以外にアメリカ文化に触れておらず、両親も同様である。それでも改革開放政策を反映してか、中国の若い世代が外国に関心を持ち始めているのが見える。しかし中国で触れることのできる外国文化はまだ少ない。カウンター・カルチャーなどは論外である。歌が好きな一達は、近所に一台しかないテレビでオペラが放送されると熱心に見入り、ルチアーノ・パヴァロッティがアメリカでもっとも人気のある歌手だと信じている。ロックなど西側のポピュラー音楽の存在はまだ知らない。

ある夜、両家は着飾ってダンスホールでの一夜を楽しむ。バンドが演奏するのは西側の音楽である。しかしそれは最新のポピュラー音楽ではなく、『マイ・ボニー』や『おお、スザンナ』、『メリーウィドウ』といった懐メロである。それは当時の中国でぎりぎり許された西洋音楽だったのだろう。あるいは新中国成立以前の時代から保存されていた古い楽譜を引っ張り出してきたのかも知れない。

一達と小于是は公衆浴場でのアルバイトの帰り、路上の売店で瓶入りの可口可乐を飲む。アメリカの企業が徐々に中国大陸に進出し始めていることがわかる。看板はどうやら手書きで、英語のロゴはやや歪んでおり、なぜかミッキーマウスが並んで描かれている。コーラ一瓶の値段が一日のアルバイト代の半分近くもすることに愚痴をこぼしつつ、一達は初めて口にしたコーラの味に驚き、むせて吹き出してしまい、小于に笑われる。日本でもコーラは大正時代から輸入されていたが、普及の度合いは極めて低く、一般的に飲まれるようになったのは国内製造が始まった戦後のことである。中国にコーラが初めて上陸したのは一九二七年で、都市部で販売されて人気を博したが、新中国成立後は西側諸国からの輸入品は禁止され、コーラも姿を消した。コーラが再上陸したのは米中国交正常化の一九七九年のことだった。社会主義国の中国にアメリカ文化のシンボリックな商品が進出したのは画期的な出来事だった。当初はあまり人気がなかったが、徐々に飲まれるようになり、現在では世界で三番目の市場に成長した。大学の入試会場で一達をねぎらう父が差し出したのも一瓶のコーラであった（ただし冷えてはいない）。

西側のファッションも中国に入り始めている。一九八〇年代の半ば、中国の都市部ではベルボトムのジーンズが流行した。それまで中国では青や緑や灰色の人民服ばかりだったが、カラフルな装いが増え始めた。中国における時尚元年とも言えるのは、ピエール・カルダンが北京の民族文化宮で時尚表演を行なった一九七九年であろう。衝撃をもたらしたこのショー以後、中国にもファッションという概念が徐々に移植された。『グレート・ウォール』でも、一達と小于がモデル事務を訪ね、オーディションを受ける場面がある。ぎこちない歩き方しかできなかった二人だが、一達は合格し、小于は身長を理由に不合格となる。中国に時装模特という新たな職業が生まれつつあることがうかがえる。またポールは小于のやや遅れたファッションセンスを微笑ましく思っている。立敏はグレースのために、中国風のブラウス

を縫う。布地の美しさに感心するグレースだが、中国のデザインはまだレベルが低いと感じている。趙氏もファッションを理解できずボールが着ているカルヴァン・クラインのジャケットに飾りつけられている肘当てを見て、生活に困っているのではないかと心配する。

こうした中国の表象は、アメリカ人から見た現代中国への興味と驚きを率直に示している。それは日本人の感覚からも遠くないし、また香港人にとっても同様であろう。表面的な後進性は微笑ましくもあり、オリエンタル趣味とも重なる。

中国の新たなイメージ

ステレオタイプな中国像として使われているのは、天安門、万里の長城、自転車の群れ、太極拳などで、これに対しアメリカを示すのは、金門橋、コーラ、フットボール、ジョギング、ロックである。

この映画の題名にもなっている万里の長城は、北京市の西北部に位置する八達嶺で撮られた。長城の訪問可能な地点のうちもっとも有名な場所、北京に旅行した外国人にとっては定番の観光スポットである。方一家は莉莉や小于たちと出かけ、露店で土産物のTシャツを買い、フットボールの真似ごとに興じる。ここでも中国とアメリカの文化が交差する。立群はしばし悠久の歴史に思いを馳せ、自身のルーツと重ね合わせているようだ。

訪中の前夜、グレースが読み上げるガイドブックの一節には「北京は城壁に囲まれた都市」とある。それは何故かと問う彼女に、立群は「侵略者を防ぎ、住民を閉じ込めるためだ。出ることも戻ることも困難だった」と答える。北京に着いた方一家が送迎の自動車で姉の家に向かう時、車窓から街を眺めた立群は「城壁はどこだ？」とつぶやく。グレースが「長城は街の北西一〇〇キロに…」とガイドブックを読み上げる。「その長城じゃない」。別のページには「北京の城壁は革命直後に首都を拡張するため破壊された」とある。開発によって姿を変え、高層ビルが建ち始めた街を見て立群は感慨を深める。

卓球も中国らしさを演出する。新中国は建国当初から卓球を国技と定め、選手の育成に力を入れてきた。そのため、一九五九年にドイツで開催された世界選手権で初優勝をおさめて以来、卓球強国の地位を保っている。中国と卓球の関係がよく知られているのは「ピンポン外交（乒乓外交）」であろう。一九七一年に名古屋で開催された世界卓球選手権に六年ぶりに出場した中国の選手が、大会終了後にアメリカやヨーロッパの選手を中国に招待したことで始まった、西側との一連の外交のことである。朝鮮戦争以来敵対していた米中関係が緊張緩和に向かい、同年七月の大統領補佐官キッシンジャーの極秘訪中、一九七二年二月のニクソン大統領訪中につながった。『グレート・ウォール』のオープニング場面の中には、体育館で卓球の素振りをする大勢の子供たちの姿が映る。卓球の英才教育ぶりを見せつけるかのようである。ヒロインの莉莉とボーイフレンドの一達も卓球の上級者であり、また映画のクライマックスでは一達とボールは卓球の試合で対決する。卓球は米中をつなぐシンボリックな使われ方をする。互いの肉体を傷つけ合うような激しい闘いではないが、両者の苦悩と力量を示すこのシーンは、単なる卓球の試合を超えて、キャラクターの魂に触れている。

この自転車の洪水もまた、この時代の中国のステレオタイプとなった。莉莉と友人の詹は、自転車で天安門の前を走り抜け、街路樹の並ぶ大通りを下る。当時の中国にはまだモータリゼーションの波は訪れておらず、道路には自転車の洪水を縫うようにトローリー・バスが走っていた。一九七〇～八〇年代の中国では、自転車は三大神器の一つに数えられ、ナンバプレート（ナンバープレート）の装着が義務付けられていた。購入には際しては購入券を必要とするほど高価だった。

立群は毎朝の日課としていたジョギングを北京滞在中も試みる。トレーニングウェアに着替えて中庭に出ると、そこでは趙氏が悠然と中国武術の一つ、太極拳を行なっている。スポーツ科学の見地から練られたジョギングと、宇宙と一体化し内部の気の充実を図る太極拳と

の対比が示される。整腸作用もあるのか、趙氏は一連の動作の結びで放屁をする。帰国した立群は自らの身体に中国を取り込もうと、早速ジョギングを太極拳に置き換える。まだ趙氏のようなスムーズな動作ではないが、放屁に成功する。太極拳の健康効果は古くから知られていたが、その習得は容易なものではなかった。新中国の国家体育運動委員会は、万人向けの新しい太極拳の考案を武術家に命じ、一九五六年に簡化太極拳を制定した。武術というより体操として行なうことが一般的となっており、八〇年代からは、外国にも広まっていた。

北京滞在中、立群は中国コンピューター協会に招かれる。アメリカから来た専門家である立群に対し、職員たちは興味津々の笑顔を向ける。二階のコンピューター室に入ろうとする立群は、靴をスリッパに履き替え、白衣を着用するように促される。精密機械の敵である埃の侵入を防止する措置である。そのような仰々しい雰囲気の中、コンピューター室のドアが開かれる。がらんとした広い部屋に置かれているのはたった一台のPCである。立群は軽い失望と困惑を顔に浮かべる。それでも促され、手袋をした手でキーを叩く。プリンターから出力された紙を見て「この字は違っていい」と言う立群は、それは中国で使われる「簡体字」であると説明される。中国におけるコンピューター黎明期である。現在のコンピューター環境からすれば、隔世の差がある。一九五六年に中国のコンピューター産業が始まったが、五〇〜六〇年代はまだ閉鎖的だった。改革開放政策以降は弾みがつき、一九八三年には国際レベルの超大型機「銀河」を開発した。もっとも当時は世界的にも個人用パソコンを持つ人はわずかで、まだ電子メールもインターネットも使われていなかった。

四合院という親密な空間

王正方は最初の訪中の後、香港の雑誌に数編の小説を発表していたが、同じ雑誌に寄せられていた美術家の張明明（一九四〇〜）の文章に感銘を受けたことがあった。『グレート・ウォール』の撮影に

際し、王は、北京育ちで当地の文化や習慣を深く理解していた彼女にプロダクション・デザインを依頼した^①。それでなくとも、改革開放後の初の米中共同制作であるため、双方には経験がなく、社会主義国のスタッフは労働に対する考え方も異なり、その調整は難航した。ロケでは多くの野次馬に囲まれて撮影に支障をきたすことも多かった。映画ではエキストラの素朴な表情がリアルさを増している。エキストラなのか野次馬なのか判然としないほど自然である。こうしたドキュメンタリー的な演出は、『半邊人』での体験が影響していると思われる。

一方、『グレート・ウォール』には、中国映画がロケ地としてあまり選んでこなかった場所が散見される。その一つは公衆浴場である。この撮影に際し、王正方は嫌がる俳優の何人かに裸になるよう説得したが、当局はヌードシーンを心配し、フィルムを没収すると警告した。王は「そう決めたのなら、そうすればいい」と抵抗した。結局、当時の中国では非常に稀なことだったが、このシーンは残すことができた^②。

映画では、中国の政治的イデオロギーについては言及されない。オーブニング・タイトルの場面の天安門付近での移動撮影のショットで、マルクスと恩格スの大きな肖像画が映り、ここが社会主義国家であることを示している程度である。またボールと過ごすうちに、西洋文化に感化され、化粧をしてアメリカ風のファッションに身を包んだ莉莉を、グレイの中山服姿の役人風の二人の男性が不審な顔で見ている場面は、撮影以外の過程で王正方が当時の中国の官僚制度に悩ませられたことを暗に批判しているようでもある。先述のように、王は文革期の中国を訪れたことがあったが、映画では文革についての言及はない。わずかに、立敏の「爸爸過去の那年、正赶上乱（お父さんが亡くなった年は乱にあった）」（乱は英語字幕では chaos）というセリフで示されるだけである。文革の始まった一九六六年を示している。

趙一家が暮らす家は、四合院と呼ばれる中国北方に見られる伝統

的家屋のスタイルである。東西南北に配置された四棟（正房、東廂房、西廂房、倒坐房）が通路でつながり、中庭を持つ。撮影に使われたのは京劇俳優の梅蘭芳（一八九四―一九六二）の旧居で、北京市西城区護国寺街九号にある。北京には古い四合院が残っているが、住宅事情の關係で、複数の家族が住んでいるのが一般的である。趙一家の三人は四合院を独占して住んでいるが、新中国成立後、四合院が国家机关の職員住宅として割り当てられたという経緯を反映した設定と思われる。梅蘭芳の旧居は、映画の撮影に使われた後の一九八六年十月、梅蘭芳記念館として一般公開され、北京市の文物保护单位に指定された。現在では、記念館に限らず、四合院の並ぶ風情のある胡同（路地）は外国人好みの観光スポットになっている¹⁹⁾。

王正方は、一九七一年の訪中の際、子供時代に住んでいた家を訪ねている。北京市東城区東南部に位置する西總布胡同三十八号にあった四合院である。もちろん別の家族が暮らしていた。西總布胡同は、東は朝陽門南小街、西は東單北大街、南は新開路胡同、北は外交部街胡同に隣接する全長七五四メートルの通りである。「談笑に鴻儒あり、往来に白丁なし」と言われるほど、ここから無数の思想、作品、人材が輩出したとされる。立群が数十年ぶりに帰った故郷で迎えられる家は、懐かしき老北京を象徴する四合院という設定でなければならなかったのである²⁰⁾。

鼓書芸人と文化大革命

『グレート・ウォール』には、印象的な場面がある。それは、長らく異国に暮らした立群が中国の伝統芸能に触れることで、みずからのアイデンティティを確認する場面である。街の一角にある地域の集会所のような建物で、立群と趙氏は伝統的な歌を楽しむ。北方地域で流行した北京発祥の「京韻大鼓」と呼ばれる演芸である。そのルーツは、清代の初めに山東、河北の農村で形成されたとされる大鼓書である。それが北京・天津方面に伝わり、京劇の唱法などを取り入れて発

展したのが京韻大鼓である（京韻大鼓のほか樂亭大鼓・奉天大鼓等地方に数十の曲種がある）。唱詞はおおむね七言句や十言句を基本とし、大鼓と拍板でリズムをとって謡い、三弦・琵琶・四胡などの弦楽器の伴奏をとまなう。坤書館・樂子館と呼ばれる寄席や街頭で演じられた。どこか日本の浪曲などとも共通するものがある。北京到着の日の深夜、目が冴えてしまい、一人中庭に出た立群は、亡き父が歌っていた姿を思い出す。それは「赤壁の戦い」の一節である。

京韻大鼓の場面で、四人の人民服姿の奏者らと演じているのは、駱玉笙（一九一四―二〇〇二）である。彼女は幼いころから京劇を学び、上海の「大世界」で歌っていたが、一九三一年から京韻大鼓に転じ、北京で演じ始めた。京韻大鼓の「駱派」を成し、『劍閣聞』『俞伯牙摔琴』『紅梅閣』『臥薪嘗膽』『重整河山待後生』などを代表作とした。映画で彼女が演じているのは、『擊鼓罵曹（鼓を撃って曹を罵る）』である。これは『鸚鵡賦』を著した文学者禰衡（一七九―一九八）の故事を歌ったものである。傲慢不遜な禰衡はその毒舌ぶりで有名だが、「曹操を正面から罵倒した男」として民衆の人氣が高い。京劇の演目『打鼓罵曹（擊鼓罵曹）』には、孔子の子孫である儒学者孔融（一五八―二〇三）の勧めで曹操の宴席に呼ばれた禰衡が、太鼓を叩きながら曹操（一五五―二二〇）を罵る場面がある。言論の自由という概念の無い時代に、圧倒的な権力者であった曹操を公然と批判した禰衡の態度の痛快さと、ダイナミックな太鼓で知られる演目である。

王正方は、ある種の伝統芸能を映画の中で使うつもりだったが、『グレート・ウォール』のような規模の作品では、大劇場での京劇を使うのは少し不釣り合いだと考えていた。思いあぐねていた彼に、プロダクション・デザイン担当の張明明は北京に住む兄の張伍を紹介した。張伍は北京戲曲学院を卒業した京劇俳優で、舞台では老生（善良な中高年の男性の役）を専門とし、文化大革命時代は样板戲（革命模範劇）を歌わされていた。映画の構想を聞いた彼は、駱玉笙を訪ね

るよう強く勧めた。彼女の『撃鼓罵曹』を聴いた王正方は、音色、リズム、表現のすべてに感銘を受け、自分の脚本との一致を感じた。そして、一日かけて駱玉笙の演奏の場面を撮影した。

『撃鼓罵曹』とはこのような話である。曹操に呼ばれた禰衡は宴席で太鼓を叩くよう命じられる。警備の役人が、禰衡の服装がみすばらしいのをとがめる。しかし禰衡は服を脱ぎ去る。昔の中国では人前で裸になるのは非礼とされていた。ましてや宴席には、総理大臣である曹操以下、錚々たる大臣・官僚たちがいる。しかし禰衡は全く気にせず、そのまま太鼓を叩く。一同はその見事さに聴きほれる。丸腰のまま言論で戦いを挑む者を殺すことは、さすがの曹操にもできない。こうして、禰衡は面と向かって曹操を批判した硬骨漢として歴史に名を残した。

駱玉笙による京韻大鼓では、次のように歌われる。

漢末諸侯乱紛争、群雄四起動刀兵。

曹孟德位央群臣權勢重、挟持天子把令行。

都只為招安劉表來帰順、要請一位風流名士前往疏通。

那孔融愛重儒兼恰才子、修本上表要保荐禰衡。

(試訳)

漢代の末の時代、群雄割拠して権勢を競い合う。

曹操の地位は他的大臣よりも強大なり、皇帝を人質にして指揮を執った。

劉表を帰順させるため、風流な名士を一人頼んで説得にあたらせねばならない。

孔融は儒学を勉強する才子を大切に思い、禰衡を推薦しようと上奏文をしたためる。

この場面に、英語字幕は次のようにつけられている。

In the last days of Han Dynasty, Heroes and bandits vied for power.

Powerful Premier Tsoo ruled the land. A Talented but arrogant scholar, Miheng.

Angered by the Premier abuse of power, Took off his clothes in protest at a state banquet.

He beat the drums and cursed the Premier. Our hero was put to death.

欧米の一般観客には、禰衡と曹操の逸話についての知識はないと思われる。『撃鼓罵曹』は十五分ほどの演目であり、映画で使われているのはその導入部のみである。しかしここで歌われる禰衡の逸話を伝えるため、後半部分の英語字幕は、あえてこの演目の全体の意義を説明するものに替えられている。日本公開版の字幕はこの英語字幕をもとに、以下のようになっている。

時は漢代の末の頃 栄華の夢も今いずこ 群雄割拠して権勢を競う

国を治めるは力の宰相の曹 これを苦々しく思う学者あり

曹の横暴をば諫めんと 国賓の宴席にて衣服を脱ぎぬ

太鼓をばたたき曹を呪う そのため死罪に処せられたり

されど伝説として歌い継がれぬ

下線部分は、英語字幕にもない言葉で演目の大意を補っていることがわかる。

劇中、立群は趙氏に勧められて京韻大鼓を聴きに来たのであろう。歌に聴きはれている立群を見て、趙氏は得意げな表情を見せる。小

「¹手もガールフレンドの²詹を連れてやってきているが、彼女の方は退屈らしい。

駱玉笙は解放後の一九五一年、天津曲芸団に入り、一九五三年には人民義勇軍の慰問公演のため北朝鮮へも赴いている。しかし文化大革命期の一九六六年に活動を停止させられた。京韻大鼓が革命的でないと思われたためと思われる。文革後の一九七六年に彼女は活動を再開し、『グレート・ウォール』の撮影の翌年の一九八五年四月、中国曲芸家協会の主席に就任している。曹操は『三国志演義』や旧劇の舞台では奸臣として描かれてきた。しかし、文革の時期、毛沢東は曹操を「素晴らしい政治家、軍事家であり、また素晴らしい詩人でもある」と再評価した。同じ頃、作家の郭沫若（一八九二～一九七八）も曹操を肯定的に評価した。江青ら四人組は「批林批孔運動」を展開する中で曹操を反儒教の人物として称賛した。『撃鼓罵曹』が曹操を痛烈に批判した³禰衡を称賛する内容であれば、文革時代には当然演じることができなかったであろう。王正方は、曹操の横暴を諷めた⁴禰衡の故事に、毛沢東の暴走を穏やかに抑えた周恩来の姿を見ていたのだろうか。儒家になぞらえられて四人組から攻撃された周恩来だが、毛沢東も如才なく実務を処理する周恩来の姿を儒家の典型と見ていたようである。『グレート・ウォール』の趙氏も、過酷な文革時代を生きて延びたかつての政府高官である。趙氏が『撃鼓罵曹』を立群に勧めているのも、中国の政治状況が良い方向に向かっていることを感じているからであろう。

映画の終わりの方で、一達の部屋を訪ねた小于是、『撃鼓罵曹』をテープレコーダーで聴かせる。一達が「これは何だ？」と問うと、小于是「今、流行ってるんだ」と答える。一九八五年八月十六日から九月九日、中央電視台で老舍原作のテレビドラマ『四世同堂』（全二八話）が放映された。これは中国で最初の長編テレビシリーズで、反ファシスト戦争の勝利四〇周年を記念して制作された。このドラマのオープニングで流れる主題曲は駱玉笙（小彩舞）の『重整河山待后生』

であった。確かにテレビを通じて京韻大鼓の復権がなされようとしていたようである。

京韻大鼓の演奏はこの映画の中でもっとも鮮やかでまばゆい場面となった。この映画がアメリカやその他の地域で好評を博すと、駱玉笙の芸術的業績もまた国際的に知られるようになった。彼女は晩年に書いた回想録でこの映画の撮影の経験について言及している。⁵

映画のエンディング・クレジットでは、立群が駱玉笙のように太鼓を叩いている。心身とも中国人としてのアイデンティティを回復したような恍惚の表情である（もっとも王正方の言によれば、母方の祖先は曹操だとされる）。

この映画に出演した中国の俳優の何人かは、その後、国をまたぐ人生を送ることになったのも興味深い。

趙莉莉を演じた李勤勤（一九六三～）は、この『グレート・ウォール』が映画デビュー作となった。彼女は一九八〇年に北京電影学院の演技クラスに入ったが、卒業後、父の意向で病院の登録係として働いた。俳優を目指していた彼女は、中国系アメリカ人の監督が北京で映画のヒロインを選んでいくと聞くと、オーディションを受け、『グレート・ウォール』での役を得た。一九八六年初頭の出国ブームの高まりにともない、李勤勤は日本に渡り、一年後にフランス、スイスなどを転々とした。最初の結婚相手である日本人との間に一人息子をもうけ、二番目の夫はアメリカ人、三番目はフランス人だった。

莉莉のボーイフレンドの劉一達を演じた王霄（一九六二～二〇〇四）は、パイロットだった父・王凡、上海人民芸術劇院の舞台俳優の母・嚴麗秋（一九三〇～）の間に生まれた。母は李翰祥監督の同級生だった。王霄は福建省で軍に入隊し、軍の歌舞団ではソリストを務めた。映画デビュー作の『グレート・ウォール』でもその美声を披露している。その後香港に移り、一九八九年、UCLAロサンゼルス校の映画学部を卒業、香港映画で数々の悪役を演じた。二〇〇〇年に

中国に戻って監督となったが、二〇〇四年、肝臓癌のため北京で死去した。

劉一達^{リョウイチダ}の友人の小于^{シュウ}を演じた修健^{シウケン}（一九六四）は、舞台やテレビ、映画で活躍する俳優である父・修宗迪（一九三九）の影響を受け、十歳から舞台や映画で演じ、天才子役と呼ばれた。『グレート・ウォール』出演後の一九八六年に来日し、以後日本を拠点に映画やドラマで俳優活動を続けている。

彼らの人生は、改革開放政策やその後の中国を象徴している。

この映画の日本公開の経緯も少し異色だった。当時、大手の配給会社はアメリカのインディーズ映画にあまり関心を持たず、いくつかの小規模な配給会社がミニシアター系の劇場向けに配給している状況で、その本数も多くはなかった。『グレート・ウォール』が日本で公開されるとすれば、そのようなパターンが考えられた。しかし結果的に『グレート・ウォール』は映画配給の素人によって買付けられた。

ニューヨークの映画館のレイトショーでかかっていたこの映画に感銘を受けた深谷哲夫（一九五六）が、アートディレクターの浅葉克己（一九四〇）にその面白さを伝えたところ、日本公開の予定がないのなら自分たちで買ってはどうかという話になった。最初は賛同者の一人でマガジンハウスの編集者だった小黒一三（一九五〇）がいくつかの配給会社を買付けを打診したものの、はかばかしい返事は得られなかった。結局、自分たちでの買付けを決意した小黒らが出資者を募った（一口五〇万円で、学割もあり）。契約などの手続きのため、小黒は新会社トド・プレスを設立した。

映画は一九八七年七月に東京渋谷のミニシアターで公開された。ポスターやチラシなど宣伝美術は浅葉が担当し、小黒は人脈を生かして雑誌やテレビなどの媒体で宣伝を展開し、映画ファンはもとより、サバルカリーの観客の動員に成功した。配給収入から出資者へ還元し、さらにアメリカ側の業者に興行収入の歩合を払うと、予想以上の金額

で驚かれたという。なおトド・プレスはこれ以降映画の配給を行っていない。

ともあれ、『ピーター・ワン』の名は、アメリカの才気あるインディーズ映画監督として日本でも知られることになった。

四 『グレート・ウォール』以降

『グレート・ウォール』の成功の後、いくつかのメジャースタジオは次回作をオファーしたが、王が選んだのは『激光人／レーザーマン』（鐳射人／The Laser Man）をインディーズ作品として作ることだった。メジャースタジオが王正方に求めたのは『グレート・ウォール』のようなほのぼのとしてかつ文化的なコメディだったが、彼は同じ路線の映画を撮ることに関心はなかった。

『激光人／レーザーマン』（一九八八）は、アメリカ（正方電影公司）と香港（電影工作室）の合作映画であるが、一般的には香港映画と見なされることが多い。香港の徐克^{ツイ・ハーク}（一九五〇）が製作総指揮を担当し、香港で活躍する人気スター、梁家輝^{レオン・カフ・レイ}（一九五八）や葉文倩^{イ・ツァン}（一九六一）らが出演していることも、そうした印象を与えている。この時期、徐克が製作総指揮をした呉宇森^{ジョン・ウー}（一九四六）監督の『男たちの挽歌2（英雄本色2）』（一九八八）に、王正方は教会の神父役でゲスト出演しており、『半邊人』以来、再び香港ニューシネマへの接近を見せた。

『激光人／レーザーマン』のアイデアは、ベトナム戦争反対運動に参加しながらも、国防省の出資でレーザー探知機の開発にたずさわっていたという自己矛盾に苦しんだ王正方の大学院生時代の体験がもとになっており、科学者の社会的責任を映画のテーマにしている。『グレート・ウォール』での体験から、そのメッセージを伝えるにはコメディという形式がふさわしいと考えた。前作の興行的成功のおかげで、出資を得ることは比較的容易になり、アメリカだけでなく、日

本や香港からも集まった。スタッフもインディーズ系で活躍する人々が多く、撮影監督にスパイク・リー作品のアーネスト・ディカーソンが参加し、エンディングテーマ曲は坂本龍一が担当した。

映画は、ニューヨーク市警察の名物刑事、魯警部（王正方）が捜査を担当したある事件の顛末である。レーザー光線の開発に従事するアーサー・ワイズ（マーク・ハヤシ）は、実験中に助手を事故死させ、研究所を解雇される。家族を抱え困ったものの、義弟で怪しげなブローカーのジョーイ（梁家輝）とともに、ジャネット（マリアン・ウルバーノ）、スズ（葉文倩）という娘との恋に身をやつす。そんなアーサーのもとに研究費出資の話が舞い込むが、その目的はレーザーを暗殺に使うことだった。暗殺計画に加担させられそうになった彼は、ルー刑事の機転で救われる。

王正方は、ここでは主人公ではなく狂言回しとして登場する。東洋の哲学と西洋のテクノロジーの両方を備えたキャラクターはやはり自身の投影である。彼の演じる上海系のル・ズミン（漢字表記は魯治民か？）警部は、自分の姓を英語風にルーと呼ばれることを苦々しく思っている。孔子の「自らを抑制し、世の習わしを外れぬこと」を自らの信条とし、宋代の判事であった先祖のことを意識している。

『グレート・ウォール』とは打って変わったタッチの作品であるが、米中の文化衝突は共通したテーマである。アジア人をはじめ、様々な人種が交錯する。オリエンタリズムにひねりを加えた野心もうかがえるが、どれほど効果的だったかは疑問が残る。SFとしてもコメディとしても弱い印象を受ける。中国人の魂が自分の身体に閉じ込められていると信じているユダヤ人女性のエピソードなど、笑いを狙った場面もインテリ向けで、やや空回りしている。アメリカでの興行成績は芳しくなかった。

徐克はハリウッドからプロデューサーとして招かれたものの、徐克も王正方とともに強烈な個性の持ち主であり、協力のプロセスは必ずしも順調ではなかった。ハリウッド側は最終的には王正方

を支持し、徐克はその不満を正統派のSF映画の制作に向け、日本の漫画を原作とする『妖獣都市』（妖獣都市）（一九九二）の製作へ向かった。

『激光人／レーザーマン』の日本公開は一九九〇年十月のことで、シネセゾンの配給で渋谷の劇場でレイトショー公開された。『グレート・ウォール』の興行的成功を上回ることではできなかった。

一九八八年、台湾の戒厳令が解除された。台湾の映画会社としては最大手の中央電影公司是、王正方を招聘して映画を製作した。王正方は一九八五年、母が危篤となった時に一次ビザがおりて二週間の滞在がなくなっていたが、それ以来の帰郷であった。故郷の台湾で撮ったのは、『ファースト・デート』（第一次約會／First Date）（一九八九）である。台湾（中央電影公司）とアメリカ（正方電影公司）の合作映画であるが、台湾の撮影所システムの中で製作され、実質的には台湾映画である。出演者たちは台湾の俳優で占められ、北京語が使われた。王正方は主人公の父を演じた。

『ファースト・デート』は、一九五〇年代後半の台北を舞台とした、王正方監督の自伝的青春グラフィティで、外省人として育った少年時代の体験をもとにしている。

学業に熱意が持てず落ちこぼれ気味の高校生の家洛（張世）は、担任の化学教師・劉先生（石雋）から文才を認められ、文章を書くよう勧められる。ある日、化学の授業中に起きた爆発事故が原因で、劉先生は休職処分を受ける。それが親友の復生（李興文）が父親の権力にものを言わせて休職に追い込んだことを知った家洛は復生と絶交する。そして復生のガールフレンドの碧雲（黃嘉晴）に接近する。下町育ちの彼にとっては、彼女との交際は未知のアメリカ文化の窓口でもあった。劉先生は担任を外されて復職、そして碧雲は留学のためアメリカに去った。一年後、晴れて国立大学に入学した家洛に、劉先生の入院の知らせが届く。劉先生は枕元に家洛と復生を呼

び、二人を和解させる。

このストリートな青春映画の主人公は、人生の進路を示すチップス先生のような恩師と出会い、初恋を経験し、その恋愛をめぐって友人と対立し、そして和解する。少年の成長譚で、アメリカの青春映画を容易に連想させる。アメリカというフィルターを通した台湾の姿である。ここでもアメリカと中国（台湾）の文化的衝突あるいは邂逅が描かれる。日本の支配下から解放され、アメリカ文化の影響が色濃くなった時代の台湾の空気が感じられる。伝統的な中国文化に育まれる一方で、少年時代の王正方は、台北西門町の映画館でアメリカ映画を観ては主題歌を覚え、日常的にFEN (Far East Network、極東地域の米軍のラジオ放送) でアメリカの音楽に親しんでいた。主人公家洛の文才を見抜いた教師は、王の二年次の担任である呉治民がモデルである。文系と理系の交錯は、王とも重なる。化学の授業中に起こった爆発事故も彼の実体験である。

この映画で主人公が通う高校は、王正方の母校でもある建国高級中学で、楊徳昌（一九四七～二〇〇七）監督の『牯嶺街少年殺人事件』（一九九一）の舞台と同じである。映画は、戒嚴令下の時代の一九六一年に実際に台北で起きた、十四歳の少年によるガールフレンド殺人事件をもとにしている。上海で生まれた楊徳昌は、王正方が台湾に移った翌年の一九四九年に台湾へ移った外省人である。事件を起こした学生は楊の二学年上であった。当時思春期であった彼にこの事件は大きな衝撃を与えた。『牯嶺街少年殺人事件』の登場人物も多くが外省人である。国共内戦に敗れ台湾に渡ってきた外省人は、いずれは大陸に帰れることを信じ、台湾を「仮の住まい」と認識していた。しかし一九六〇年代においては、大陸への帰還は徐々に夢物語となり、大陸への帰還という「理想」と外省人として台湾で生きていかなければならないという「現実」とのギャップに苦しむことになる。映画の中では主に外省人たちの苦悩が描かれている。戒嚴令が敷かれた抑圧的な時代背景を反映して、映画は全体を通して暗いシーンが多い。夜

間に停電するシーンが多いのは、ある日突然に政府に連行されるような白色テロの恐怖を象徴している。この殺人事件の頃、王正方はすでに大学生となっていた。『ファースト・デート』は、『牯嶺街少年殺人事件』と比べると、甘美な追憶に終始しているように見える。しかし劉先生の停職処分背後には、軍の高官である復生の父の影があり、白色テロの時代の雰囲気はわずかに伝えている。

『ファースト・デート』は、日本ではコムストックの配給で、東京・渋谷のミニシアターで公開された。

王正方の劇映画は、三作品とも、異なる文化の衝突がテーマになっていると言える。

王正方は四作目の劇映画として、『生命四樂章 (A Lifecycle in Four Chapters)』を企画した。四部構成で、中国、香港、シンガポール、アメリカを舞台としている。王正方自身をはじめ、修健や余朝漢らがキャストینگされた。アメリカを舞台とした第四章に登場する余朝漢は、アジア系アメリカ人に対する差別と闘う学生生活家で、自己のアイデンティティを求めて中国へ旅をするという役である。これは王の分身であろうと思われる。『グレート・ウォール』で京韻太鼓を披露した駱玉笙の出演も計画されていた。彼女の太鼓は、ちょうど『イントランス』（一九九一）のリリアン・ギッシュのように、四つの章をつなぐ媒介ではなかったか。四作目にして、集大成的な作品のように感じられる。王は製作のための出資を募ったが、残念なことにこの映画は実現に至ることはなかった。

その後映画制作から退き、二〇〇一年に台湾へ居を移した王正方は、幼少時代から青年期を過ごした台湾の追憶を綴るエッセイを発表し続けている。主な著書に『台灣政治望春風』（二〇〇四）、『我這人長得髒扭』（二〇〇五）、『我這人語多…導演講故事』（二〇〇八）、『說電影…那個迷死的玩意兒』（二〇一二）、『孤獨在一起…我記得那些可愛的人』（二〇一四）などがある。

『グレート・ウォール』、『激光人／レーザーマン』、『ファースト・デイト』の三作は、日本で劇場公開後、VHSのビデオソフトが発売されたが、DVDは未発売であり、鑑賞が困難になっている。日本では忘れ去られようとしているのは残念である。しかし王正方は、アメリカ、中国、香港、台湾を横断しながら、そのどこにも属さない周辺的な存在と言える。早すぎた汎アジア的映画人として、さらなる評価を受けるべき映画人であると考ええる。

註

- (1) 中国の言語学者、教育家、国語運動家。中国語の標準的口語(国語)の文法を記述した『新著国語文法』によって知られる。毛沢東の師でもある。
- (2) 「王正方專欄・白色恐怖下少年十四巷一號・植物園」上報、二〇一〇年二月一九日 https://www.upmedia.mg/news_info.php?Type=2&SerialNo=81498
- (3) 建国高級中学は、映画監督の楊徳昌の出身校でもあり、映画『牯嶺街少年殺人事件』のモデルとなった事件が起きた学校でもある。また日本統治時代には、映画批評家の松田政男が在籍していた。
- (4) 「昔日 非常人語 印記1938 王正方」台湾壹週刊、二〇一二年七月二日 <https://tw.nextmag.com/realtime/news/34363307>
- (5) 同
- (6) 沈河西「老頑童王正方…我是死不悔改老不羞」新京報、二〇一八年十一月三〇日 <https://www.bjnews.com.cn/detail/154358300414869.html>
- (7) 「昔日 非常人語 印記1938 王正方」台湾壹週刊、二〇一二年七月二日 <https://tw.nextmag.com/realtime/news/34363307>
- (8) 「藝文【文評三四五】在香港的劇場與電影中發現陳映真」二〇一七年一月四日 <https://www.thenewslen.com/article/58310>
- (9) 劉虛心「日出——懷念李渝及當年共渡青春歲月的朋友們」北美華文作家協會、二〇一四年五月二日 chinesewritersna.com/review/?page_id=18668
- (10) 「半边人」(大公網評) Bai du 百科 <https://baike.baiducm.com/item/半边人/82587> 二〇一二年四月一日取得
- (11) 「王正方：日本人来轰炸就逃课，经历过这样的事到80岁也不会忘」北晚新视觉、二〇一九年三月一日 <https://www.takefoto.cn/viewnews-1716245.html>
- (12) 劉氏を演じた韓森(一九〇八—二〇〇〇)は、孫道臨が北京で結成した「南北劇社」に参加した舞台俳優で、舞台劇『雷雨』『北京人』などに出演した。後に映画『祝福』(一九五六)、『林商店(林家鋪子)』(一九五九)、『駱駝祥子』(一九八二)に出演。日本映画『空海』(一九八四)やイギリス映画『サワースワース(SOURSWET)』(一九八八)など、外国映画でも活躍した。
- (13) 中国でのロックミュージック(搖滾)の歴史は、改革開放路線の始まった一九七九年に、最初のアマチュアバンド、萬李馬王樂隊が北京第二外国语学院の学生らを中心として北京で結成されたことが始まりとされる。一九八〇年十月、天津の天津第一工人文化宮で開催された「第一回中日友好音楽祭」に日本のバンド、ゴダイゴ(中国語表記は後醍醐)が出演したのが中国で最初のロックコンサートとなった。慣れない観客たちが音響の大きさに驚き耳をふさいだという。翌一九八一年には、アリスが北京の北京工人体育館で日中共同コンサート「バンド・イン・ハンド北京」を開いた。一九八三年、数名の外国人によって中国初のロックバンド、大陸樂隊が結成。八〇年代には、七合板樂団、黒豹樂団、唐朝樂隊などがデビューした。この時期はハードロック系が主流だった。
- (14) ハンバーガーのマクドナルドの中国進出は一九九〇年のことだった。ハンバーガーは西側の大衆的食文化の象徴となった。香港映画『ラブソング(甜蜜蜜)』(一九九六)では、一九八〇年代に天津から香港に移住した青年が、憧れのマクドナルドに行くという場面がある。マクドナルドのロシアでの最初の outlet(モスクワ)も同じ一九九〇年のことで、西側の文化として熱烈な人気を得た。開店当日に三万八千人が訪れ、それは冷戦終結の象徴となった。二〇一二年のロシアのウクライナ侵攻をきっかけにロシアのマクドナルドが営業を停止したことも象徴的な出来事である。
- (15) 現在では訪日した中国人が、自転車の多さに驚くという。
- (16) 作家の張恨水(一八九五—一九六七)の娘。彼女は北京の小学校では、王正方の同窓生。
- (17) 王正方「永不休止的啼笑因緣」(9/11/2012 聯合報副刊)、北美華文作家協會 chinesewritersna.com/review/?page_id=6503 二〇一二年四月一日取得
- (18) 「老頑童王正方…这个世界越来越坏，所幸我已经老了」新京報 https://k.sina.cn/article_1644114654_61f32de0200gyu4.html 二〇一〇年四月一日取得
- (19) 筆者が訪れたことのある北京の四合院は二軒で、一つは知人の住む家、一つは作家の茅盾の旧居である。
- (20) 「王正方：日本人来轰炸就逃课，经历过这样的事到80岁也不会忘」北晚新视觉、二〇一九年三月一日 <https://www.takefoto.cn/viewnews-1716245.html>

news-1716245.html

- (21) 一九三〇年代、上海租界にあった一大娯楽施設。
- (22) 王正方「永不止止的啼笑因縁」
- (23) 一九七四年一月、林彪事件の後を受け、毛沢東の下で江青らによって提唱された。表向きは林彪の裏切りと孔子の思想を批判するものだが、その内実は江青ら四人組が周恩来を攻撃するためのものであった。
- (24) 王正方「永不止止的啼笑因縁」
- (25) 『ファースト・デート』リーフレット、一九九一年、シードホール／コムストック、八頁
- (26) シードホール（渋谷）
- (27) 「徐兎《妖獣都市》首映29週年，鮮為人知的幕後故事再談」、二〇二一年十一月二〇日 <https://auzhu.com/entertainment/3056131.html>
- (28) シネセゾン渋谷（渋谷）
- (29) シードホール（渋谷）

参考文献

- 『グレート・ウォール』パンフレット、一九八七年七月二三日、トド・プレス
- 『激光人／レーザーマン』パンフレット、一九九〇年一〇月一二日、シネセゾン
- 『ファースト・デート』リーフレット、一九九一年八月一日、シードホール／コムストック
- 田中千世子「ニューヨーク「非アメリカ」へ向かうニューヨーク・インディペンデント・シーン」、キワード事典編集部編『映画の現在形』、洋泉社、一九八九年
- イメージフォーラム12月増刊号「アジアン・アメリカン映画」、一九九〇年、ダゲレオ出版
- 四方田大彦『電影風雲』白水社、一九九三年
- 濱口幸一、村尾静二、編集部編『現代映画作家を知る17の方法』フィルムアート社、一九九七年
- A Great Wall Directed by Peter Wang At the Nickelodeon*, By Shari Rudavsky, July 11, 1986
- First Date*, Rita Kempley Washington Post Staff Writer, June 07, 1991
- 「1966-1986 首輪影片票房紀錄」電影雙周刊出版社、一九九〇年
- 王正方『調笑如昔「少年」』北京出版集團北京十月文芸出版社、二〇二〇年

付記

電子メールで、筆者の質問、事実確認に快く応じて下さった王正方氏に深く感謝いたします。